

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館 ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
連絡所
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



海風や寒風がことのほか強く吹く日も、第五福竜丸展示館には、開館と同時に元気な子どもたちが訪れています。

平和の心を育てる一翼として

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

明けましておめでとうございます。

二一世紀の始めにあたり、平和への決意を新たに、人間と自然の調和、地球環境保護等、人類の新しい諸テーマに取り組みたいと考えます。

多くの人々の手で保存され守られてきた第五福竜丸は、その比喩なきやり方で人々の間に平和の心を育てる一翼を担うことが、いよいよ期待されています。

展示館のそばに第五福竜丸のエンジンが並べて配置され、また、敷地も整備されたことにより、足を運びやすくなりました。東京地婦連から記念植樹を賜わり、春には八重紅大島桜が美しい花を咲かせるでしょう。

「エンジンを夢の島へ」の運動が縁で、二一世紀に第五福竜丸から平和を発信する役割をしっかりと果たしていこうという趣旨で、都民運動諸団体による「連絡会」が昨年十二月に発足しています。

今年にはボランティア国際年でもあります。いくつかの美術館等で行われているように、当第五福竜丸展示館においても、館内での説明や案内・誘導の補佐役としてボランティアの方々に来ていただければどんなに素晴らしいことかと、夢を描いております。

都立第五福竜丸展示館の業務を委託されている私ども財団法人第五福竜丸平和協会はその役割と責任の重さに改めて思いを致し、それにふさわしく自らの組織と財政基盤の強化を図りつつ、東京都の理解も得ながら、新世紀において私たちに与えられた課題に立ち向かっていく所存です。

引き続き各位のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

第五福竜丸エンジンを東京・夢の島へ 都民運動にかかわって思うこと

水越 雅子

新年明けましておめでとうございます。新しい世紀を迎え、心より平和の世紀でありますように願っております。

第五福竜丸のエンジンが船体と再会して一年が経ちました。その節は多くの皆様のご協力を賜わりありがとうございました。

私がこの運動に関わったのは、東京都生協連がこの運動の事務局として携わったことにあります。今にして思うと、本当によく実現できたものだと思うと同時に、た



エンジンの前で子どもたち

いへん意味深いものだったと思います。それは第五福竜丸保存運動もエンジン保存の運動もどちらも市民運動によるものだというところにあります。

私が平和に関心をもったのは、子育てに夢中になっていた時に見た一枚の報道写真がきっかけでした。それは、アフリカのどの国

だったか、内戦により難民キャンプに逃れた女性や子ども、老人たちが不安におびえながらテント生活をしているなかで、やせ細った子どもに授乳している母親の姿でした。明日への命の補償もない状況の中で、母親はどんな思いで子どもにお乳を飲ませているだろうかと思像し涙が溢れ出しました。

その後、東京都生協連に関わり、平和担当として会員生協を引率して広島へ同行することになりました。私には広島で被爆した従兄弟がいます。ケガをして入院している時に被爆し背後からガラス

を全身に浴びました。終戦後は、長い間ガラスの破片によるひどい痛みやさまざまな症状の繰り返しに苦しめられたという話を話では聞いていたもののどのような状態だったのかは想像出来ませんでした。しかし、被爆者との交流を通して、今私が立っているこの現場でそのような恐ろしいことがあったということを想像し、私の従兄弟や多くの人々の苦しみを考えると体が震え涙が止まりませんでした。そして、戦争や核に対する怒りを覚えました。

そのような、平和に対する認識の中で私は、「第五福竜丸のエンジンを東京夢の島へ都民運動」担当者として途中から関わりました。正直言って第五福竜丸事件については、子どもの頃、新聞の写真を見た記憶がある程度でこの事件が日本にとってどんな意味があったのか深く知りませんでした。しかし、三浦市がまとめたマグロ事件に関する記録集を読んだ時、初めてこの事件が日本の核兵器廃絶運動の原点になっていたということを知り、第五福竜丸のエンジンを東京・夢の島へ都民運動の意義の

大きさを改めて感じました。それにしても、船体とエンジンを再会させるために各地域で自主的にイベントを企画し盛り上げながら、和歌山から東京までをリレーで繋いでいくといったことで実現にこぎつけて、そのことに行政も陰ながら支援をし、多くの市民や、マスコミの方々が注目するなかで最後の「第五福竜丸エンジン・お帰りの集い」へとつながり、納まるべきところに収まり、本当に胸が熱くなる思いでした。

世界で日本は唯一の被爆国です。広島・長崎、そして第五福竜丸と普通に生活していた人々が一瞬にして被爆し、亡くなるという事が現実であったのです。しかも三度にわたる被爆の苦しみ恐ろしさを経験しているのです。今でもいつ何となくで核戦争が起こるかわかりません。これからのこの運動の意味を次世代に継承し、繰り返してはならないと声高らかに世界に発信していくことだと思います。

(東京都生活協同組合連合会 常任組織委員)

第五福竜丸展示館をたずねて

中野 光

イギリスの国際法学者でノーベル平和賞の受賞者でもあったノエル・ペーカー(Philip J. Noel-Baker)一八九九—一九八四は一九七七年に身体の不自由をおして広島と長崎を訪れた。そしてNGO主催の「被爆者の実情に関する国際シンポジウム」に出席し「広島と長崎の生存者であるわれわれもまたヒバクシャである」と発言し、参加者に深い感動を与えた、という。

一九四五年八月六日、アメリカが広島に原子爆弾を投下したとき、まさしく地球は「核時代」に入ったのだ。一九四五年は「核時代元年」であった。一九五四年の三月一日午前三時四十五分(日本時間)アメリカがビキニ環礁で水爆実験を行ったのは「核時代一〇年」のことであった。被害はあらかじめアメリカが設定していた「危険区域」をはるかにこえてひろがった。日本のマグロ漁船第五福竜丸もその区域外で操業していたのに「死の灰」を浴び、現地

島民の二四三人も被爆した。久保山愛吉さんをはじめ島民四十数名が生命を奪われた。

当然のことながら、被害は人間や人間が造ったものだけではなく、地上と地下の生物にも及んだ。私は去る一月十三日、第五福竜丸展示館をはじめて訪れた。そこで知りえたのはビキニ事件では八五六隻の漁船が放射能を浴びて、汚染されたマグロ等の魚類で廃棄されたものは四五七トンにも及んだ、ということだった。四五七トンの魚という数字で想像できるのは四トン積みトラックのおよそ一〇台分をこえる量である。それも海中で汚染されたり、殺されたりした生物のごく一部にすぎないのだからこの水爆実験による自然(人間をふくむ)への殺生・破壊の規模の大きさははかり知ることができない。

展示館を訪れて、さらに注目し、考えざるをえなかったことは、世界の核保有国がアメリカと旧ソ連をはじめとして一九九八年

までに二、〇五七回もの核実験を行った、ということである。私は三年前、アメリカ・ワシントンのスミソニアン宇宙航空博物館の原爆コーナーを観たが、核兵器開発に関するかぎり、アメリカは「神をも恐れぬ国」であると思わざるをえなかった。あの『沈黙の春』(一九六二年)を著わしたレイチェル・カーソン(Rachel Carson)一九〇七—一九六四をうんだアメリカが、「人類的暴挙」をくりかえしたことはやがてはきびしい歴史の審判を受けるにちがいない。

しかし、展示館は参観者を決して「絶望の淵」にさそいこむことはなかった。数多くの資料が悲しみやなげきから希望を拓いてきたことを示してくれていたからである。たとえば、ビキニ事件の翌年、「核時代十一年」の一九五五年七月、日本初のノーベル賞受賞者、湯川秀樹をふくむ十一人の著名な学者たちによる「ラッセル・アインシュタイン宣言」が核兵器廃絶を訴えたこと、その後国際的に高揚した原水爆禁止運動の高まり、そして多くの人々の努力によって実現した第五福竜丸の保存

運動の成功といった事実等が紹介されている。

それだけに、一九七六年に東京都によって設立された第五福竜丸展示館が果たしている役割は大きい。私は帰りがわにいただいた冊子に記されていた次ぎの文章に深い感銘を受けた。

「第五福竜丸展示館には、核兵器のない未来への願いを体現した水爆被災船が丸ごとの姿で、りりしく座っている。この展示館は、被災船自らが核実験を告発し水爆の恐ろしさを語りかける、世界でただ一つのミュージアムである。第五福竜丸は、核と人類のかかわりの面で、たんに過去の歴史の記録にとどまらず、人類の未来への警鐘であり続けるであろう。」

展示館への参観者、とくに小中学校から参観件数が年ごとに増えている、という。すでに部分的にはじめられ、二〇〇二年から全面的に実施される「総合学習」の平和や環境に関する学習もここを拠点としても発展していくことを期待したい。

(教育学研究者)

あたり前のことを行動する二一世紀に

中村 博

第五福竜丸の近くに久保山さんの碑とエンジンとまぐろ塚がある。第五福竜丸が何を語るかが一目瞭然である。

二千年度、数回足を運んだ私は、そこでいろいろなことを見た。二〇世紀が生んだ最も醜いもの『原子爆弾』。現職の教員とき、六年生の子どもを連れて夢の島を訪れて子どもたちが感じたことを聞いたことがある。目に涙をためて「こんなひどいことを許していいの」と、怒りをぶつけてきた子どもの目や言葉。その子どもたちがいまや社会人、そして働き盛りの三七歳になる。

数か月前のこと展示館の中でこの小学生が「夢の島」への遠足の一部に「第五福竜丸」にやって来たのにぶつかった。展示館に入ったと思ったら五分もしないうちに、「はい、つぎの植物園に行きます」という担任の言葉です。すーっと出ていくのです。「結構でかいじゃん」「もっとボロかと

思ったのに」と言いながら立ち去っていくのです。

また、高校生のクラブ活動で見学にきていた学生に出会ったのもその頃です。事務局の方を呼んできて話を聞き、メモを取り、と言うように真面目に被爆のことを聞いている姿を見たのです。この高校生たちは外にある久保山さんの碑を見たり、エンジンを見学したりしたあとで、まぐろ塚のところでも話あったりしているのです。こういうのを見ていると、ただ単に風化しているとは言えないように思うのです。そこで何を学ぼうとしているかという姿勢に関係があると思うのです。

私どもは十年ほど前から第五福竜丸展示館の中で久保山さんの命日九月二十三日の日に『平和を語る集い』を実行しています。紙芝居・語り・合唱・ソコ等など協力者が増え、時間不足になり、午前・午後とプログラムをかえて

行ってきています。資金で支えてくたさる方も増え、十万円以上の寄付も続けています。それほど大掛かりな宣伝もしていませんので、お客さんが少ないのがちょっと残念です。この機会に宣伝させてもらいますが午前は十時から、午後は一時半からです。

さて、私は仲間といっしょに、チェルノブイリの原発事故が起きて十年後、ベラルーシに行き事故後の様子を調べてきましたし、病院やその他の施設での交流もしてきました。あの事故のとき、飛行機に乗って火を消しに行ったパイロットの方にもあって話を聞いてきました。まさに「死の灰」は目では見えないのです。「安全だよ」と言って差し出された果物を私は食べることは出来ませんでした。それが、それを食べなければ食べ物が無い国民と病人を見て、なにをどのように訴えたらよいのでしょうか。年末に原子炉は全面的に封鎖されたことはマスコミの報道で知りましたが、それでもこの土地で生活をしている方たちの不安は解消されていません。二〇世紀

の最後に再びベラルーシに出かけた仲間が、「一歩前進しました。ヨーロッパの国々が原子力発電をやめようと努力し始めました。これも一歩前進です。でも日本は……」と、残念そうに報告してきました。

『平和を語る集い』では、これらのことも皆さんに生の声で伝えることが出来るでしょう。

戦争の連続であった二〇世紀、最も醜いもの核兵器をなくすことが二一世紀に課せられた大問題です。私どもがちょっと油断すれば、それらの醜いものが世界をどんだん支配してきます。世界に誇れる『日本国憲法』を守り育てる運動こそ、私どもの使命です。第五福竜丸がそれを見守っているようにおもうのです。

人間にとって「あたり前のこと」をあたり前に言う。あたり前に行動する二一世紀をともに築こう！

(日本子どもを守る会会長)

